

博士学位論文審査報告書

Summary of Doctoral Thesis and Report of Examination

研究科長 殿

下記のとおり、審査結果を報告します。

To the Dean:

We report the result of Examination for the Doctoral Thesis below.

学籍番号 Student I.D. No.: S -

学生氏名 Name: 勝方三稲福恵子

和文題名 Title in Japanese: 沖縄女性学の構築：うないイズムの文化実践

英文題名 Title in English: The Construction of Okinawan Women's Studies---"Unaiism," a performative discourse for Okinawan women's activity

記

1. 口述試験参加教員 Faculty Members Involved in Oral Examination

①審査委員会主査 Chief Referee of the Screening Committee

氏名 Name: 後藤乾一 印

所属 Affiliated Institution: 早稲田大学アジア太平洋研究科

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution
博士(法学、慶應義塾大学)

②副査(審査委員 1) Deputy Advisor (Member of Screening Committee 1)

氏名 Name: 天児聡 印

所属 Affiliated Institution: 早稲田大学アジア太平洋研究科

資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution
社会学博士 一橋大学

③審査委員 2 Member of Screening Committee 2

氏名 Name: 内海愛子 印

所属 Affiliated Institution: 大阪経済法科大学

資格 Status: 客員教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution
学術博士 早稲田大学

2. 開催日時 Date / Time: (Y)2012 / (M) 12 / (D) 20 (Time) 6 時 限 ~ 7

Period
時限[時限 / Period] 1st: 9:00-10:30, 2nd: 10:40-12:10, 3rd: 13:00-14:30, 4th: 14:45-16:15, 5th: 16:30-18:00, 6th: 18:15-19:45, 7th: 20:00-21:30

3. 会場 Venue:

4. 合否判定 Result: ●合/Passed ●否/Failed (該当する方に○ Circle as appropriate)

5. 添付資料 Attached document(s)

7 枚 pages (和文4,000字程度、もしくは英文1,500語程度。ただし、論文題目のみは、和文・英文を併記すること)

(Approximately 4,000 characters in Japanese, or 1,500 words in English. The Doctoral Thesis title, however, must be written in both Japanese and English.)

博士学位（論文博士）請求論文審査報告書

題目 沖縄女性学の構築：うないイズムの文化実践

英文タイトル The Construction of Okinawan Women's Studies---“Unaiism,” a performative discourse for Okinawan women’s activity

提出者 勝方＝稲福恵子（早稲田大学国際学術院教授）

1. 本論文の主旨

「沖縄学の父」伊波普猷によって 1919（大正 8）年に公刊された『沖縄女性史』以降、近現代沖縄の「女性問題」は沖縄研究のみならず女性史研究一般においても重要な地位を占めてきた。本研究の著者は、その伊波の先駆的研究を継承しつつも、1980 年代以降世界的に関心が高まったジェンダーとエスニシティの視点を導入し、新たな視座から沖縄女性史を再構成すべく 2006 年に『おきなわ女性学事始め』を上梓した。それ以来、著者は本学において琉球・沖縄研究所を立ち上げるとともに、国際学界における該分野の研究推進・交流の指導的立場にあったが、本論文はその研究の一つの到達点を画するものである。著者の基本的立場は、「沖縄女性」を可視化・言語化する場を拓くと共に、そのような場としての「沖縄女性学」という学問ジャンルを構築し、それを文化的実践の場として充実させることを意図したものである。そうした著者の問題意識は、第 1 部「沖縄女性学」という場（トポス）、第 2 部うないイズム（Unaiism）一言説としての「うない神」、第 3 部「エスノポエティクス（沖縄の詩学）の確立に向けて、と題された本論文の有機的に構成された題目からもうかがわれる。

2. 構成と内容

全 3 部 8 章からなる本論文の章立ておよび各章の概要は以下のとおりである。

はじめに

第1部 「沖縄女性学」という場（トポス）

序

第1章 伊波普猷『おきなわ女性史』の言説

第2章 植民地的近代性の両義性

第3章 「沖縄女性学」というトポス（場）

第2部 うないイズム（Unaiism）一言説としての「うない神」

序

第1章 うない神信仰と祭祀組織

第2章 うない神信仰を「現代」につなぐ

第3部 エスノポエティクス（沖縄の詩学）の確立に向けて

序

第1章 幻の作家・久志芙沙子

第2章 異端の語り

第3章 エスノポエティクス（沖縄の詩学）を拓く

参考文献

次に各章の内容を要約しておきたい。

『「沖縄女性学」という場（トポス）』と題された第1部、第1章「伊波普猷『おきなわ女性史』の言説」は、本研究の基点として沖縄女性史のみならず日本女性史研究においても先駆的な業績である伊波普猷の『沖縄女性史』の再評価を試みる。伊波は世界でも稀な沖縄の女性祭祀組織に着目しつつ沖縄女性の解放への道筋を展望するが、そこでは「日琉同祖論」を説きながらも沖縄女性の真の解放は日本女性化することではないと考えていたことが指摘される。こうした伊波の思想は、1972年の施政権返還40年後の今日なおその輝きを失ってい

ないこと、そして彼が提唱した議論は反復帰論や独立論が渦巻く中で一つの羅針盤足りうる可能性が指摘される。さらに伊波の思想を継承するとすれば、沖縄女性にとって独自のトポスを立ち上げるために「沖縄女性学」というジャンルを構築することの必要性が強調される。

第2章「植民地的近代性の両義性」では、タニ・バーロウの「コロニアル・モダニティ」概念を援用し沖縄女性の置かれてきた状況が考察されるとともに旧植民地台湾・朝鮮、さらには「満州」との比較についても言及される。また沖縄に生まれ育った著者が、「日本」に同化しきれない自身の違和感を言語化するためにジェンダー批評とポスト・コロニアル批評の方法論にも依拠しつつ女性概念の相対化を試みる営為としての本研究が定位される。著者は、ジェンダーとエスニシティの複合的視点を磨くことが沖縄女性学には不可欠だと指摘するが、「エスニシティ」も「ジェンダー」も本質主義的概念ではなく、「ジェンダー」は文化的・社会的権力に沿って形成されるもので決して一枚岩ではないこと、「エスニシティ」も「人種」という本質主義的概念に変わり 60 年代以降普及し始めた流動的・構築主義的概念であることが力説される。

第3章の題目「『沖縄女性学』というトポス（場）」という名称は、沖縄女性を語る場を作りたいとの思いに由来するものであることが指摘される。同時に著者は 21 世紀に入り女性学というカテゴリーそのものを否定する学派が登場する中で、本質主義的な「沖縄女性学」というジャンルが可能であるのかとの自問自答があったことも、本章執筆の動機であったことにも言及がなされる。著者は「沖縄女性学」というジャンル設定は、日本的「女性」概念が一筋縄ではいかないことを明らかにし、「沖縄学」そのものを「ジェンダーとエスニシティ」の視点で捉え返す場を構築することに大きな意義を見出す。第1章で論じられた伊波普猷の沖縄学が、沖縄を差別・貧困から脱却させるためその地を「まると」把握しようとしたことにならい、「沖縄女性学」もその伝統を受け継ぐものであることが改めて鮮明に表明される。

「うないイズム (Unaiism) 一言説としての『うない神』」と題された第2部、

第1章「うない神信仰と祭祀組織」では、沖縄の民間信仰における「女神」ともいうべき「うない神」についての民俗学的考察がなされる。伊波普猷『沖縄女性史』、佐喜真興英『女人政治考』等沖縄女性史研究の古典、さらには戦後の宮城栄昌『沖縄女性史』にせよ沖縄女性像の根底にあるのが「うない神」であることが指摘され、沖縄では近代化の波に洗われるごとに「うない神」が女性のエンパワメントのために多用されることに着目する。うない神信仰に基づく「祭祀権」を保持していることが女性の地位の高さや自立性を保証する事例として、久高島の神女たちが近代法による土地の個人所有制度に対抗して土地共有の地割制度を守った闘いが紹介される。そうした事例を通し、ジェンダーの区別が女性の排除や抑圧に直結しない女性優位システムが機能している沖縄の特異性が論じられ、それを支える女性祭祀権の存在は世界史的に見ても稀であることが指摘される。

第2章「うない神信仰を『現代』につなぐ」では、「うない」が女性たちを奮い立たせる言説として現代の沖縄の女性運動につながっている事例が論証される。とりわけ1985年に世界の女性運動の高まりに触発される形で始まった「うないフェスティバル」に着目し、この行事が「うない」という言葉を現代に蘇らせた契機であったことが指摘される。著者は、「うない」や「女性」を掲げた運動体は、政治的代表性と文化的表象を自らの手に取り戻す実践として考えられるとし、「うない」はその実践の中で「伝統的文化」と「フェミニズム」が「絶妙の出会い」をした事例と捉え、それは第2波フェミニズムと民俗信仰の親和性を物語る稀有なものであると評価する。そして先祖返りのように多用される「うない神」がフェミニズムに立つ現代沖縄の女性運動に与えた影響を、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」「人権を考えるうないの会」等の具体例を通じ考察する。

第3部「エスノポエティクス（沖縄の詩学）の確立に向けて」の第1章「幻の作家・久志英沙子」では、「民族の詩学」と訳出される「エスノポエティクス」という文化論的なジャンルを拓き、主流の文化とは異なる一つの言説空間を構築することで、もうひとつの自己認識・自己肯定を許容する場を可能としたい

との著者の立場が提示される。その上で 1932 年 6 月号の『婦人公論』に「滅びゆく琉球女の手記」を寄稿し在京沖縄学生から弾劾された久志芙沙子の生涯を掘り起こす。ここでは従来の研究では知られなかった久志の重要な作品も発掘・紹介され、彼女の存在自体が作家としては幻に終わっても/終わったからこそ、様々な物語を増幅させて、ヤマト化されない沖縄女性のひとつの神話を創出していると結論づける。

第 2 章「異端の語り」では、「沖縄女性学」というジャンル設定により、語ることなく死んでいった人たちの未生の物語を言語化する試みがなされる。それによって歴史的にも、地理的にも、また文化的にも、中心から遠く隔てられることによって息づく「おきなわ女性」の無限に存在する「沈黙」を言葉にする意義が明らかにされる。具体的には沖縄からの最初の芥川賞受賞作品となった大城立裕『カクテル・パーティ』が描いた強姦された少女の深い沈黙を言語化する営みの意味を掘り下げる。その他にも崎山多美「水上往還」、山之口貌「沖縄よどこへ行く」など沖縄出身の文学者の作品分析を通じ、沖縄戦に関わる人々の沈黙を含む近現代沖縄の痛みを未生の物語として考察する。

「エスノポエティクス（沖縄の詩学）を拓く」と題した最終章、第 3 章は具体的な言語論（「方法としての沖縄語：近代言語イデオロギー対シマクトゥバ」や文学論（「沖縄文学というジャンルを成り立たせているもの」）を展開し、2010 年公刊の山里勝己著『琉大物語 1947－1979』にみるようなポストコロニアルな状況に対する抵抗のありかたを考察する。また本章結部においては第 1 部でも論じられた組踊『執心鐘入』が再度取り上げられ、その作品に登場する 3 人の主人公を、儒教イデオロギー・首里王府、聞得大君御殿・琉球在来 of 民俗宗教、仏教・大和権力といった当時の政治的 3 極構造の寓話として再解釈し、さらにそれは現代の沖縄社会を象徴する比喻としても援用可能でないかと示唆する。

3. 口頭試問の評価

本論文審査委員会は、上記した提出論文の慎重な査読を踏まえ 2012 年 12 月 20 日午後 8 時より 2 時間にわたり面接審査を行った。そこで交わされた議論の主たる論点は以下のとおりである。

・「沖縄学」とは異なる「沖縄女性学」を立ち上げる必要性はどこにあるかとの質問に対して、今日なお「トートーメ問題」など深刻な構造的な女性抑圧が存在するとともに女性同士の抑圧もあるので、女性学の視点でなければ見えてこないところがある。その点に「沖縄女性学」を構築する理由があると考えているが、その部分をもう少し膨らませて考えてみたいとの回答がなされた。

・コロニアル・モダニティの解放と抑圧の 2 重性は、女性だけの問題ではなく、大田朝敷のような近代沖縄の男性知識人にも当てはまるし、さらには朝鮮・台湾の植民地知識人の問題とも繋がってくるのではないかとのコメントが出された。それに対し著者は、コロニアル・モダニティの用語はシンシア・エンローが東アジアの女性たちの置かれた抑圧の 2 重性を表現するために使い始めたものなので、本論文でも沖縄女性を東アジアの女性の状況と比較・対照するために用いたとの返答がなされた。

・女性を鼓舞する論拠として「古琉球」世界を過大評価している感があるが、当時の儒教思想の影響の大きさを考えるならば女性抑圧も相当強かったのではないかと、との問いに対しては、伊波普猷を典拠とし「古琉球」を取り戻すことが女性解放に繋がるという視点が前面に出たが、今後伊波の『沖縄女性史』をより具体的に検証し自身のコメントを深めてみたいとの回答がなされた。

・沖縄内部の差別構造についても言及が必要ではなかったかとの問いに対しては、確かに首里・那覇を頂点とするヒエラルキーが存在し宮古島への差別感も顕著であったが、こうした内部差別に対する克服の試みとして本論文ではシマクトゥバ条例の意義を強調した。具体的には琉球語の復活運動において、首里・那覇の言葉を復活させるのでは封建遺制を助長することになるので、従来差別されてきた各村落共同体の固有な言語を復活させるべきとの意見が出され、そ

の結果シマクトゥバという表現が定着したという事実が強調された。同時にそれだけでは沖縄内部の差別構造の実態を解明する上では不十分であると認識しているので今後の課題としたいとの発言があった。

- ・ 沖縄の社会構造とりわけ家族制度に与えた明治政府の戸籍政策の影響とはいかなるものであったかとの問いに対しては、その政策を沖縄の女性たちがどのように受容した抵抗したかについては「明治新政府による近代化への反応」としても一般化でき、今後の重要な研究課題として行きたいとの返答があった。

- ・ 1920－30 年代の在京沖縄女性会「あけぼの婦人会」は近代啓蒙主義の系譜に立つ婦人組織であるが、彼女らは広津和郎事件や久志芙沙子事件等に対しどのような対応を示したかとの質問に対しては、その視点を欠落させてしまったが、今後は関連資料のさらなる渉猟を通じ精査してみたいとの返答がなされた。

4. 審査結果

本論文審査委員会は 提出論文の査読および口頭試問の結果を踏まえ審議を行ったが、本研究は斬新な問題設定、広範な一次資料の読み込み・先行研究（とりわけ沖縄研究・ジェンダー研究）のクリティカル・リーディングを踏まえ、明快な文章でまとめられた学術性の高い独創的な研究であることを委員全員が認め、早稲田大学博士学位授与に値する論文であると評価した。今後は口頭試問の過程で出された諸問題についての考察を深め、近い将来専門的学術書として公刊されることが期待される。